公開・国際シンポジウム「イメージとヴィジョン　東西比較の試み」

# 討議記録

奥 健夫／秋山 聰 司会

**奥健夫**：時間となりましたので、始めさせていただきます。今から約 1 時間の討議では、今日、ご発表いただいた先生方に、他の先生方のご発表の内容をふまえた補足や、ご質問等を中心にお願いすることにしたいと思います。まずは私から、導入程度のことを短くコメントさせていただきます。このシンポジウムの以前からの大きなテーマである東西比較という観点から、今回の発表者の方々のお話しになったことを聞き、両者の間の世界の切り分け方の違いについて考えさせられました。日本側、あるいは東洋側の発表者は皆さん、「彼岸」と「此岸」という言葉をよくお使いになりました。キリスト教の世界観では、それらは「天上」と「現実」ということなるかと思いますが、キリスト教世界では、両者は互いに固定されたものとして存在しており、その間をつなぐものとして教会、聖人、聖遺物、儀礼、そして造形されたものが存在している。今回ヴィジョンという言葉はいろいろな意味で使われましたが、儀礼や造形イメージを通じて、天上世界の存在をいかに感じ取るか、そのための認識の方法こそ、このシンポジウムで言うところのヴィジョンであると、定義することができるかと思います。キリスト教世界では、切り分けられて固定された世界観を前提として、それらをいかにつないでいくかということを通じてヴィジョンが発達してきたように聞いていて感じられました。木俣先生が、多彩な造形的手だてのレトリカルな使用とおっしゃった、あるいはバッチ先生が、場所的な記憶と称される特別な技術と例示な

さったようなことであります。それに対し、日本やアジア、あるいはおおざっぱな言い方になりますが、非キリスト教世界では、そのあり方はもっと多様、あるいは流動的であると感じられました。「彼岸」と「此岸」という言葉は、もちろん用いられますが、両者がどの程度截然と分かたれているのか、両者の空間的な位置関係はどのようなものであるのか、あるいは彼岸には何が存在しているのか、以上のようなことについて様々なとらえ方が可能であり、それらは時代や状況に応じて変化していく、という感じがいたします。非常におおざっぱかつ乱暴な言い方で、そもそもキリスト教世界と非キリスト教世界という切り方自体、有効か否かという問題があることも承知の上ですが、少なくとも今日のご発表の中では以上のようなことが基本的な問題としてあるのではないかと感じました。それから、今回、先生方の論点が多岐にわたっておりますので、少しでも議論の焦点をつくるために申し上げますと、イメージが何のために作られるのか、すなわちイメージの機能の問題と、今日の先生方のお話とがどのように絡んでくるのかということにも興味を抱きました。ヴィジョンを他者に獲得させることがイメージの大きな機能の一つであるとするならば、たとえばイメージが無いことと、イメージを持たずにヴィジョンがある状態と、あるいはイメージが無いというのも、一つのイメージで、視覚イメージを持たないというイメージと言えばいいのでしょうか、ランベッリ先生がおっしゃったことに関係すると思いますが、逆にイメージが必要とされない状態もまた、おそらくあるのだろうと思います。両者の違いはどういう点にあるのかといいますと、イメージが必要とされない状態とは、おそらく共同体の中においてヴィジョンがすでに共有されている状態なのだろうと思います。一方、ヴィジョンが共同体を超えて広がっていくさいに、イメージが必要とされていくという状況があるのかなと思い浮かびました。もちろん、そういう単純な話ではなかろうとも思いますけれども、とりあえずランダムに申し上げました。ここからは、ご自由にご発言をいただきたいと思います。

**秋山聰：**それでは、ご発表くださった先生方同士で、ご質問やご意見などお

持ちかと思いますので、自由にご発言いただきたいと思います。まずはケスラー先生、いかがでしょうか。

**ハーバート・ケスラー：**このシンポジウムの間ずっと、秋山先生が冒頭で提示された問いについて考え続けていました。なぜキリスト像の髪に人のではなく馬の毛が用いられることがあったのか、という問いです。答えを得るにはいたりませんでしたが、私はこの問いから、身体と聖遺物をめぐるある問いにたどり着きました。それは、今日にいたるまで未だきちんと論じられていない問題、言うなれば図像の裏側にあるものへの問いです。つまり、図像はどこまでリアリティを持ちうるのか、ということです。ビザンツ帝国の人であったテッサロニキのシメオンについて言及した有名なテキストがあります。その中に、彼が西欧を訪れた際に、あまりにも写実的な、キリストを実在の人物として表象しているイメージを見て、衝撃を受けたことが記されています。この問いの方向性は、午後に行われた諸発表を聞いて私が感じたことと関係しています。木俣教授は、マシュー・パリスによるキリストの顔を我々に示しましたが 、同じくマシュー・パリスによる、対となるイメージは示されませんでした。そのイメージは、石に足跡を残すキリストの足を示しています。マシュー・パリス自身は、石に残された、このキリストの足の聖遺物は、実際にはヴェロニカと結びついていると述べています。それゆえ、キリストの顔のイメージと、物質世界に残された彼の足跡との間には関連があるのです。私が言わんとしていることは皆さんお分かりでしょう。なぜなら、我々は最初期のブッダの表象、あるいは非表象が、石に残されたブッダの足跡というものであり、キリストの痕跡と全く同様であったことを知ったからです。私は、他のパネリストの皆さんに対し、特に申し上げたいことがあります。これら二つの表象の間にはなんらかの関係性がありうるのでしょうか？　もし仮に関係が無いのだとすると、この平行現象をどう理解すればよいのでしょう？　私がより重要な問いであると考えているのは、聖人の身体や、物質に残された痕跡におけるその身体の跡と、聖遺物や痕跡よりもはるかに禁忌であるように思われる、顔のヴィジョンとの間の関係なのです。

**秋山：**今のお話に関し、馬の毛のみについて私の方から一つお答え申しあげますと、なんでも人間の髪の毛では薄すぎる、細すぎる。馬の髪の毛くらい厚くないと像の頭にかぶせたときに量感が出ないということがあったようです。とりわけ、キリスト像は少し距離を置いたところから見られますので、人間の髪の毛を使った場合、少し頭が寂しいということになってしまうようです。したがいまして、やはり馬の髪の毛の方が見た目にキリスト像に見える、ということがあるのではないかな、と個人的には思っております。その他の点につきましてはおそらく壇上の先生方からふさわしいお答え、あるいはご意見をいただけるのではないかと思います。いかがでしょう、木俣先生。

**木俣元一：**キリストの足跡が、彼が昇天した山の上に残っていることを示す画像は、たしかに『大年代記（Chronica Majora）』の挿絵にありますね。身体において対極的な部分である頭や顔と足との関係は非常に面白い問題です。頭や顔は天上に近く、キリストのそれは、ヴェロニカというかたちで残されてはいるものの、基本的には天上世界でないと見られないものとされます。それに対して、足は体のなかで地上に接する部分であり、キリストの人間としての側面を象徴しています。ある意味両者は対になって、天上と地上をつなぐ神でありまた人間でもあるというキリストをあらわすと考えられます。

それから、今日は顔の話が中心であったと思いますが、キリストに関しては、他にもさまざまな痕跡が残されています。例えば、キリストが鞭打ちを受けた円柱に彼の体の跡が残されており、あとトリノの聖骸布（スダリウム）には全身像の体の痕跡が残されております。痕跡の存在は、身体がかつて存在していたということを伝えてくれるものであり、キリストがかつて肉体を備えて地上に在ったということを証明する一つの手がかりになっているのではないでしょうか。一方、痕跡の存在は、キリストの不在についても間接的なかたちで伝えているような感じがいたします。

**秋山：**たしかに、顔の痕跡があれば足の痕跡の重要度が下がるかもしれない、という気もいたします。非常に単純な感想ですが、キリストの場合、足

の痕跡が残っており、そこが巡礼地になっていたことは初期の巡礼記にもたしか出てきているかと思います。また、そこにたまった砂をコンタクト・レリックス〔接触型聖遺物〕として持ち帰ったというような記録があるかと思いますが、しかしその割には足跡のレプリカのようなものが広まりませんでした。その理由としては、今木俣先生が指摘されたように、全身、あるいは顔といった、より重要な部分の痕跡が残されていたことが関係しているのでしょうか。

**ケスラー：**実際のところ、パリスがキリストの足跡が残された石について論じた理由は、その石がイングランドに招来され、聖なる痕跡が実際に動いたためでした。キリストは自身が実在したことを示す非常に重要な形跡を他にも残していました。それは血です。キリストの血は、非常に流布しており、近現代のカトリック信仰においてすら崇拝の対象となりました。少し横道にそれますが、木俣教授がいみじくもおっしゃったように、キリスト教においては、人間としてのキリストと、その実在、あるいは不在を示す痕跡として彼と関連付けられている諸物に関するこの問題は常に存在しています。先ほどふれましたパリスの写本の図像をお見せできないのが残念ですが、それは地上から舞い上がり、足跡を岩に残しつつ、雲間に消えるキリストの姿を示しています。ここでは、消え行く彼の上半身が示されていますが、我々はこの「消え行くキリスト」のモチーフの例を他にも知っています。上に述べたように、キリスト教においては、上半身が消え行く一方で、未だに我々の眼に見えているキリストの下半身――足は彼が地上を歩いた証拠であります――に関するこの問題が存在します。この観察と共に私が向かおうとするのは、幾度と無くあらわれていたものの、我々が決して注目することの無かったもう一つのトピック、すなわち一時性の問題です。地上におけるキリストの形跡は、彼が依然として地上に存在していることを意味し、彼が姿を消したというヴィジョンの形跡は、彼が不滅であると同時にもはや地上には存在しないことを意味するのです。アウグスティヌスは、キリストは決して完全に昇天しているわけではないと述べていますが、この文脈においてはとても

興味深い指摘です。彼は依然として地上に存在しているのです。このことにより、彼の身体は天上と地上を結ぶチャネルとなり、それゆえイメージは、この天地を結ぶ軌道、この身体的プロセスに参与しているのです。彼が終末に再臨するときには、その全ては変化し、我々はもはやいかなるイメージをも有することはないでしょう。

**秋山**：それでは仏教研究の先生方から何かこの問題に関連してご発言いただけますでしょうか。ではランベッリ先生に口火を切っていただきたいと思います。

**ファビオ・ランベッリ**：先ほどケスラー先生がご指摘された問題点、仏足石と、キリストの足跡の間の関係ですけれども、直接歴史的な過程があったかどうか分かりませんが、少なくとも両者の間にはいくつかの共通点があるのではないかと思います。一つには、2人ともまず身体的な存在としてこの世に現れたのですが、同時に別の世界に住まう存在でもある。別の世界に結びついているという考え方がまずあって、それから2人ともこの世にやって来てから、いろんな運動といいますか、救済論を起動させてから不在になった。したがってその身体性と、身体に還元されない部分と、それからその不在というものが共通している点だと思います。それに関して、この不在の問題は、キリスト教、仏教の双方において異なる形で展開され、解決が試みられたのではないのかと、今ふと思いました。もちろん、キリスト教、仏教のいずれも非常に長い歴史、広い地理的な展開を持っているので、簡単に一般化することはできないと思いますが、方向性としては、キリスト教の場合、例えば神秘主義においては神の不在という大きなテーマがあって、それは超越に結びつくわけです。私はこの分野の専門家ではないので、変なことを言っているのかも知れませんけれども、キリストもいないし、神もいないので、この世から離れて、不在という次元まで超越を求めるという傾向があるのに対して、仏教の場合は最終的には汎神論、パンテイズムに展開しているのではないかなと思います。しかし、例えば中世では佐藤先生もおっしゃったよう

に、まず大規模な汎神論があって、いろんな世界、いろんな次元、いろんなかたちが創造されていったのに対して、近世になると非常に枯渇した、素朴な、単純な汎神論になって、現世の問題が日常生活に求められるようになってきて、徐々に超越的な次元が無くなっていったのではないかなと思います。いずれにしても、身体性と不在という問題が双方に共通しているような気がしてきました。

**秋山：**それでは佐藤先生、何かございますでしょうか。

**佐藤弘夫：**私は、美術史が専門ではありませんので、今回、沢山の情報が一度に入ってきて整理しきれないところがありますけれども、これまでの議論を少しずらすかたちで不在と存在について話をさせていただきたいと思います。最近、私が考えておりますのは、人間はいつから神という存在を考えるようになったのかということです。ここでの神とは、超越者という意味での神です。イメージやヴィジョンは、ある聖なるものの表現として出てきますが、これはもちろんキリスト教や仏教に限ったことではなく、それ以前からあったわけです。いつから聖なるものの表象が存在していたのか、最初に表現されたのはいったいイメージなのか、それともヴィジョンなのか。このことについて、最近考古学の方と何度か議論する機会がありました。日本の縄文時代には土偶というものがあります。そもそもあれは何のためなのか、という問題がありますけれども、やはりある聖なるものの表現であることは間違いない。ところが、次の弥生時代に入ると、聖なるものが土偶のようにストレートに表現されることは無くなってくる。それでは、神がどのように表現されるようになったかというと、例えばキリスト教では足跡で表現するという例がありましたけれども、弥生時代では神を祭る家や、神を祭っているシャーマン、あるいは神の依り代となる木など、シンボルとして表現されるようになってくる。ですから、私だけの思い込みかもしれませんけれども、聖なるものの表現というのは、最初に非常に抽象的なものがあり、それが徐々に受肉して具体的なものになっていくというプロセスを経るのかと思っ

ていたらどうもそうではなくて、縄文時代から平安時代にかけての展開というのは、聖なるものが非常に具体的なかたちで即物的に表現されていたのが、次の段階ではシンボルのようなものになっていく。さらに次の段階では、再び眼に見えない神が様々なかたちで表現されるようになっていく。イメージとヴィジョンの東西比較を考える前提として、以上のようなことを考えることによって何が見えてくるのか、その部分を考えてみたいと今回お話をうかがっていて感じました。

**秋山：**大変大きな枠組みを出していただいたかと思います。では、今度はキリスト教美術の研究者側ということで、ケスラー先生お願いします。

**ケスラー：**一つだけ、補足説明のためのコメントをしたいと思います。西洋世界、特に古代ギリシャにおいては、最初期の神々の表象は、単なる石や木片であった証拠があります。そのうちいくつかの証拠は、その表象を示すために用いられた言葉の探求を通じて得られたものですが、それらの言葉は、特に、これらの表象はおそらく、より古代文化の時代から地上に在った、あるいは海に洗われていたものであることを示唆しています。なぜならば、これらは海から、あるいは彼岸からやって来たものと考えられていたからです。古代ギリシャの語彙においてこれらの表象を指し示すために用いられた一般的な単語の一つに、“xoanon”（クソアノン） というものがありますが、これは元来「樹木を削る行為」を指し示す語でした。これらの単なる削りだされた人型がその後崇拝されたり、衣服をまとわされたり、装飾をほどこされたり、あるいは時にそれをはぎとられたり、パレードに持ち出されたりすることによって、これらの人型は次第に生命力を獲得していったのです。これは非常に興味深い問いであり、今回も仏教との類似があると思われますし、また自然的な物や、別世界から、すなわち天上の別世界から、あるいは現世の別の場所からやってきた物としての聖なる物の概念に関する根本的な人類学的問題にも遡るだろう問いだと思われます。
**秋山：**今回は主に中世を中心に議論いたしましたが、時代を古代、あるいは

近代以降にまで広げた、3 日くらいのクローズド・セッションをやってみたい気がしてまいりました。では、バッチ先生、何かございませんでしょうか。

**ミケーレ・バッチ：**この議論は、私にとって大変に刺激的なものです。私は、まさに今回提起されたいくつかのことについて考えていました。うまくいくかは分かりませんが、自分の意見をできるだけ明確にしてみたいと思います。私は、キリスト教はこの点に関して、古代地中海世界との近似性を示しているのではないか、あるいは仏教とのこの類似は追究することが可能ではないかと思っていました。私は、身体への関心という点で、この二つの宗教の間にある類似性についてファビオ・ランベッリ氏が述べたことを参照しています。この二つの宗教には聖遺物が存在しており、つまり、歴史的であると同時にある意味神聖でもある有形の存在があります。古代世界においては神の領域は、人の領域と明確に区分されているのに対して、仏教とキリスト教においては、方法こそ異なるものの、二つの領域の混淆が見られます。私は、これが、これら二つの宗教伝統の間にある関連の主要なものであると考えます。身体が果たすこの重要な機能は、様々な形で現れます。今日見てきた聖遺物はもちろん、様々な痕跡もその現れなのです。痕跡について論じるとき、我々は、存在が同時に不在でもあるという、存在の曖昧さを表現するために、ある種の宗教的戦略を利用しています。このような問題を探求する上でもう一つキーワードになるのが、影の曖昧さだと思われます。キリスト教、仏教の双方において、解釈に応じて時に類似し、時に異なる、影についての強調を見てとることができます。しかし、聖者の身体の場合を考えますと、聖者はキリストとブッダに類似する身体を獲得することができます。神秘体験を通じて悟りを得た仏教の聖者と、キリスト教の伝統において存命中に復活後の身体についてある種の予兆を得た隠者には類似した行動が見られます。聖別された身体は、神の身体の反映であり、例えば、使徒行伝においては、その霊的な力を他の一般的な身体に伝えることができると見なされていました。これは、例えば、自身の影を通じて奇跡を行った聖ペテロや聖パウロについて言われていたことです。一方で、仏教には、ブッダの最初期のある肖像画

の誕生に関する非常に重要な物語があります。彼が文字通り自身の影を地面に投じ、画家が彼の身体を描いたというものです。これは、プリニウスによって語られた最初の肖像画の発明に関する物語と類似しています。もし間違っていたら訂正していただきたいのですが、私が知る限り、日本の伝統においては、「影」（御影）はまさに聖像を指し示すのに用いられた言葉でした。さらなる類似点を確認していきます。ファビオ・ランベッリ氏は、換喩と提喩について論じましたが、私はキリスト教において、隠喩や象徴が担った役割は非常に突出したものであると同時に、換喩と提喩もまたキリスト教の表象の重要な一部であったということに全面的に同意します。隠者の聖別された身体は、それ自体キリストの完全な身体、あるいは聖なる身体のある種の換喩として機能しうるのです。ベルナール・フォールの指摘するところに従えば、仏教における聖人の表象の起源において、身体の偶像化の過程がありました。偶像化された身体、ミイラとでも呼びましょうか、そこから表象への単線的な移行がありました。これは私が知る限り、偶像として身体を用いることに対する厳格な批難が存在したがゆえに、キリスト教においてはあきらかに決して試みられることの無かったものでした。例えばアタナシウスによる『聖アントニウスの生涯』によれば、聖アントニウスは自身の身体をミイラ化することを望みませんでした。なぜならば、彼はそれが偶像、すなわち崇拝の対象として用いられかねないということを恐れたからでした。同じく『聖アントニウスの生涯』は、対照的に一部のエジプト人は崇拝の対象としてミイラを用いたと伝えています。真正の身体を用いることができないことを考えれば、このケースにおいて表象はある意味、身体の代替となりました。私は明快な主張を展開できたか否かは分かりませんが、身体と身体の投影が仏教、キリスト教双方の図像伝統の神秘的基礎とみなされていたことを観察する重要性について、ささやかな指摘をしたいだけなのです。

**秋山：**ケスラー先生、何かございますでしょうか。

**ケスラー：**はい。私は影に関するあなたの最初のコメントに立ち戻りたいと

思います。私の記憶が正しければ、福音書の一つ、ルカによる福音書において、ラテン語の“obumbrabit”が受胎告知を示すために用いられています。受胎告知の際、神は聖母マリアの上に影を投げかけました。この時、影は再び光の不在としてあらわれます。我々はたいてい、受胎告知は光線を通じて伝えられたものと考えますが、しかし神は顕現の決定的瞬間においては聖母マリアに影を投げかけたのです。これはいくつかの西欧中世の表象においては雲に翻案されましたが、仏教、キリスト教双方の文化において我々が見出したテーマの一つが、雲の使用でした。雲は、ここではとても興味深いものです。なぜならば、それは現世と来世の間の我々の世界における一定の空間を占めているからです。雲は動き、定まった形を持たず、しかし触ることができるものでもあります。雲は、仏教の伝統においては神的な存在を支える地位を占めているように思われますが、太陽を覆い隠し、その輝きを妨げるという別の効果を有してもいます。木俣教授がマンドルラについて論じた際に、私にはそれが、燃え立つような縁飾りに取り巻かれた雲のように見えました。雲は、ここでも我々の世界と別世界の間のこの空間を占有するようであり、太陽の光を影で覆うか、あるいは何らかの方法でそれをやわらげており、そのおかげで我々は神のヴィジョンに焼かれたり、破壊されたりすることの無い神のヴィジョンを知覚することができるのです。

**奥：**お話が具体的な表現のレヴェルに及んできました。雲や影について、仏教美術側の先生方のお考えをお聞かせいただきたいと思います。では、まず井手先生お願いいたします。

**井手誠之輔：**今回、私も大変刺激を受けております。今のお話、身体、身体性の問題について補足的な説明を、発表では触れなかった事例をあげつつお話したいと思います。今日、私がお話した材料はほとんど着色仏画であり、非常に物質性がはっきりしているものですが、最初にとりあげました普悦の心中感得像は、むしろその中では、着色が控えめです。逆に着色がより厚塗りである場合は、非常に現世的な意味合いが強くなります。実は、今回お話

しなかった中国の事例に、禅宗の絵画、あるいは表現で言えば水墨表現というものがあります。これは、今お話した尊格の身体性、あるいは雲、影、海といったものと関連する表現をするときに非常によく使われる手法です。そのことに関連して二つのことをお話しします。一つは、例えば釈迦のような聖なるものの精神は存在し続けるけれども、その肉体は現世には存在しないと考えるとき、禅宗では経典を介する以外にも、釈迦の悟りの境地、あるいはその精神は以心伝心で人から人へ連綿と受け継がれていくと考えています。このような考え方を少し西洋にひきつけて言い換えると、釈迦の精神が祖師の身体に受肉化（インカネーション）し続けていくということになるかと思います。これに関してヘルムート・ブリンカー先生は、かつてリインカネーションという言い方をされたことがあります。あるいは悟りの境地を表現する場合、例えば水墨を使い、禅宗の祖師を淡墨でかすかにあらわすような表現があります。これは 13 世紀の南宋時代から始まった魍魎画と称するもので、英語ではアパリッション・ペインティングと呼ばれるものです。いわば幽霊のような絵という意味ですが、これは物質性を一番希薄にした表現と言っていいでしょう。紙の上に墨で書く場合が多いのですが、墨も淡墨で表現しますので、水をたくさん含んでおります。水墨表現の伝統に基づき、イメージを創るか創らないかの、きわどい刹那みたいなところでかすかにその人の身体性を浮かび上がらせつつ、物質性は最も希薄な絵画表現となっています。これは木俣先生がおっしゃったような透明性の問題に非常に近づくような事例であるということを申し上げておきたいと思います。それから、影や雲、あるいは観音が示現する場としての海のように、不定形、定型を持たないような存在を表現するさいに、東アジア、特に中国では水墨表現が極めて有効に使われているようです。以上、二つの事柄を喚起して私のコメントとさせていただきたいと思います。

**奥：**では増記先生、今のお話に補足するところなどおありでしたら。

**増記隆介：**まず影の話ですが、寡聞にして仏画の世界で、私の専門としてい

る平安あるいは鎌倉時代の仏画の中に影の表現があるというのは思い浮かびません。ただ、神を描いたもの、例えば仁和寺にある僧形八幡の絵などには神の示顕を影のような表現であらわすものがございます。先ほどお話した厳島の祭神なども、最初に高倉天皇が行幸されたさいにあらわれたように、帳に映る女房の影としてあらわれるところがございますので、影として神が示顕するというようなところがあるかと思います。また、雲のことですが、私が先ほどあげました普賢菩薩、一番有名な東京国立博物館のもの などには雲はありません。また、廬山寺 や根津美術館 など、初期の十羅刹女、いわゆる唐装の羅刹女を伴う図様にもやはり雲はありません。ある時期から雲が出てくる。例えば、旧益田家の和装の羅刹女などは、明確に雲の上に乗っております。本来、普賢菩薩というのは雲を伴わなくて良い存在だと思いますが、十羅刹女を伴うことによってそこに雲が関わってくるというのは、集団としての示顕に一体感を与えるような側面があるのかもしれません。これが意味的な変換なのか、それとも井手先生がおっしゃったような宋元仏画における、ことに宋の仏画における雲の表現の発達というものと何らかの関連があるのか。そういったことを今印象として考えておりました。

**秋山：**それでは、実は予想に反してといいますか、かなりの質問をいただいております。しかし、時間もかなり押しておりまして、とても全てを取り上げるわけにはいきません。一つ二つがいいところではないかと思います。そこで、京都造形芸大の水野千依先生から、いくつか質問をいただいているなかの、バッチ先生のご発表に刺激されてのご質問、これを水野先生ご本人からいただけませんでしょうか。

**水野千依：**たいへん興味深いご発表ありがとうございました。三つほど質問を書きましたけれども、そのうちの一つを申しあげます。バッチ先生は西洋の方のヴィジョンやアパリッション関係のイメージでは、その前に既存の像というのが一つの刺激となってヴィジョンやアパリッションを引き起こし、さらにそれが連鎖していくというようなことをいろいろな事例をあげながら

お話くださったと思います。そのようなことは、井手先生がお話になったような、日本での事例では言えるのでしょうか。

**秋山：**では井手先生、よろしいでしょうか。

**井手：**アパリッション、あるいはマニフェステーション、これらを現代では顕現と訳していたりしますが、経験する方からすれば、それは全部幻視（ヴィジョン）ということになるのでしょうか。聖なるものの主体性が強いのか、見る側の主体性が強いのか、どちらの立場からみるかによって違いがあります。聖なるものの立場からいえば、ある時は心の中へのアパリッションであり、他では現世へのアパリッションとなり、全部アパリッションになってしまう、というところがあります。このことをふまえて言いますと、佐藤先生がおっしゃったようにアパリッション、あるいは聖なるものが現世に顕現する場所とは基本的に霊場である可能性が一番高くなると思います。霊場に何らかの像や、聖なるものを呼び込みやすいような何か、例えば宿り木のようなものがあったり、あるいはそこにすでに聖地が形成されたりしていれば、顕現が日常的に起きるということになってくるのだろうと思いますが、どうでしょうか。そういった意味では、同じような事例は探せばたくさんあるかと思います。

**秋山：**ではほかの先生方、何か補足的なコメントはございませんでしょうか。それでは、バッチ先生。

**バッチ：**基本的な問題の一つは、実際にはサイト（場所）とヴィジョンの間の相違と関連性です。基本的な問題は、多くの場合、両者の違いは確かに明確なものではないので、ヴィジョンとは何か、そしてアパリッションとは何かを理解することです。基本的にアパリッションでさえも、個人的、集団的根拠に基づいて、ヴィジョン、アパリッション双方になりえます。これはもう一つの興味深い点です。あなたのご質問にお答えするためには、様々な文

化的コンテクストにおけるヴィジョンやアパリッションを経験する方法に関する情報を収録した一種のデータベースを我々は構築する必要があるでしょう。

**水野：**おっしゃるようにヴィジョンとアパリッション、それから最後井手先生が三つに分類された、それ自体も西洋にはぴったりあてはまるものではないのかもしれません。特に造形イメージでは当てはまらないと思います。しかし、このことについて考えていくと面白いなと思っております。

**秋山：**まだまだ会場の方々からのお話もうかがいたいところですが、そろそろ時間が迫っておりますので、最後のご発言を、基調講演をいただいたケスラー先生からお願いしたいと思います。

**ケスラー：**私は禅宗の水墨画に関する井手教授の指摘について考えていました。おそらくこれは冒頭、秋山教授が我々に提示したアルブレヒト・デューラーのエッチング 、これもまた墨絵の一種であり、最小の彩色で最大の内容を含むものですが、これに立ち戻るまったく良い機会であると思われます。私が思うに、このケースには、そのような表象に関して西洋が直面した多くの問題が凝縮されているのです。

まず最初に、アルブレヒト・デューラーは当時の新しい技法であったエッチングによる作品を 4 点しか描いていませんが、彼はその内の 2 点でキリストの聖なる顔を描いています。この技法は、銅板の表面を蝋で覆って線画を刻み、これを酸に浸すというものです。つまり実際の製版は酸によって行われていて、手書きによるものではありません。このような技法が、これらの表象に用いられたことは偶然ではないと考えます。ですから、ここには主題化の諸相という問題があらわれます。我々の多くは、作品の内容を実際に主題化する素材、美術の素材について論じました。それは私が指摘したい最初の点です。すなわち、図像が、たとえば墨の使用や技法の単純さや、あるいは実際の製作過程においても、存在と不在に関する諸問題を反映している

という点です。

第二の点は、秋山教授が冒頭に紹介された図像を思い出してほしいのですが（p. (9)、図 10)、図像がさかさまであるという事実に関してです。絵画の上部に向かっているのは、二つの現実の間を行き来する存在である天使です。天使はキリスト図像を下から見上げています。この図像は空中に浮かび、天上に向かって昇っていくように消えつつあります。絵画の最上部、キリストの図像のかどが折れているところ、その裏側にはまったく何の表象もあらわされていません。それは単に光であり、空白なのです。私が思うにこれはデューラーのすばらしい思いつきです。一方の側では我々は表象を見ることができるのに対し、他方では何も、一切の表象が存在しないのです。これは再度私を、木俣教授が行った、キリストの顔の表象であるグルベンキアン黙示録におけるアケイロポイエトン（acheiropoieton 「人の手によるものでない」図像）に関する指摘へと導きます。この絵画においては、布の裏面にあるように見えます。表現し得ないものを表現するという表象の問題は、これら様々な論説においてずっと繰り返し利用されてきたテーマであります。

**秋山：**実はケスラー先生はデューラーの作品についても御論文をお書きになっていて、今日どこかでおっしゃっていただこうと思っておりました。それでは、時間が参りましたのでこれで閉会ということになりますが、このシンポジウムは協賛ということで本学の美術史学研究室が協力いたしました。そこで、閉会にあたりまして美術史学研究室の主任、佐藤康宏教授からご挨拶いただきます。

**佐藤康宏：**美術史学研究室の佐藤です。討議はまだまだこれから佳境に入るという感じがしますが、だいぶお疲れの方もいらっしゃるようですので、残念ですがこの辺りでお開きにしたいと思います。最初に短い感想です。私たちの生には限りがあるということを文字通り身をもって教えてくれるのが死者です。ひとりひとりの死者が教えきれないことを掬い上げ、集合的にしたものが宗教であり、また宗教的なイメージであろうと思われます。そこで

あらわされるイメージというのは、非常に切実で、のっぴきならないものであって、今日のお話では、今はもうどこかへ去ってしまった聖なる存在の痕跡を示す試みや、我々の住む世界から遠く隔てられている聖なる世界、向こう側の世界を見るための試みなど、仏教・キリスト教双方に共通する、非常に切実な要求がいかなるかたちをとるのか、ということについて、様々な例を示していただき、大変意義深かったと思います。具体的には雲の表現や、インプリントとかアパリッションなど、非常に面白いテーマがございました。場所を変えてこの議論をどこかで続けてもらえたらいいなという風に思っております。

以下は短い謝辞です。まず、遠くからお運びくださったケスラー先生、バッチ先生、ランベッリ先生、キリスト教と仏教のイメージについて新たな視野を開いてくださいましてまことにありがとうございました。また、国内から参加していただいた佐藤、井手、増記、木俣の各先生のお話も、私には初めて聞く内容ばかりで、大変新鮮でおもしろうございました。それから、問題が広がって仕方ないであろうこの討議をしきられた秋山、奥のおふたりにも感謝します。そして複雑な議論を英語から日本語へ、日本語から英語へと、一日中やりとりしていただいた、同時通訳の皆さん、大変お疲れ様でした。ありがとうございました。それから最後に何日も前から準備に携わり、今日も朝からこのシンポジウムの運営に力を注いでいただいたスタッフの皆さん、ありがとうございました。

（おく・たけお　文化庁美術学芸課主任文化財調査官）
（さとう・やすひろ　東京大学大学院人文社会系研究科教授）
（みずの・ちより　京都造形大学教授）